

無症候性脳梗塞における頸動脈超音波検査・四肢脈波検査の検討

上村 香穂里, 船内 和美, 有田 幸子, 辻本 伸宏, 吉本 正伸, 西尾 功
(奈良市総合医療検査センター) 新 靖史 (奈良県立医科大学脳神経外科)

<はじめに> 無症候性脳梗塞は動脈硬化性疾患の一形態と考えられる。当センターにて無症候性脳梗塞と診断された受診者において頸動脈超音波検査、四肢脈波検査の検討を行ったので報告する。

<対象・方法> 2002年5月2日～2004年6月30日までの頭部MR受診者のうち頸動脈超音波検査と四肢脈波検査を同時施行し、MRIで異常なしと診断された21例(A群 43～70才, 平均55才)と無症候性脳梗塞と診断された37例(B群 50～78才, 平均64才)について比較検討を行った。頸動脈超音波検査は東芝SSH-140A, 7.5MHzリアブ[®] D-7[®], B-mode法により血管性状を観察し、左右総頸動脈の内中膜複合体の最大厚(maxIMT)を計測した。四肢脈波検査はフクダ電子社製Vasera VS-1000を用い脈波伝播速度(PW)とAnkle Brachial Index(ABI)を測定した。

<結果> A群(異常なし)・B群(無症候性脳梗塞)のそれぞれの平均値は表のとおりであった。A・B群の平均値差を比較検討した結果($P<0.05$)、脳梗塞のある患者とない患者では右左平均maxIMT、右左平均PWで有意

差を認め、右左平均ABIには有意差は認められなかった。maxIMTが1.1mm以上でMRIにて無症候性脳梗塞と診断された症例は79%。右左PWで14.1 m/sec以上では85%、maxIMTが1.1mm以上かつPWが14.1m/sec以上では84%であった。

<まとめ> 無症候性脳梗塞患者ではmaxIMTとPWが高い傾向にあり、全身の動脈硬化性変化が関与していると考えられる。四肢脈波検査に加えて頸動脈エコーにて高度狭窄の有無の検索と動脈硬化性変化の程度を評価する事が有用であると思われる。

(表) A群(異常なし)・B群(無症候性脳梗塞)の右左平均値

	右左平均maxIMT	右左平均PW	右左平均ABI
A	0.78mm	13.68m/s	1.12
B	0.95mm	16.15m/s	1.15

(連絡先 tel0742-33-7876 内線104)